

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 秋廣 尚恵 印

学位申請者

関 敦彦

論文名

フランス語の副詞的形容詞について：コーパスデータに基づくスキーマ化の試み

【審査結果】

秋廣尚恵を主査とし、主任指導教員の川口裕司（東京外国語大学名誉教授、外部委員）、および副査として黒澤直俊（東京外国語大学名誉教授、外部委員）、藤縄康弘、大谷直輝からなる審査委員会は、関敦彦氏の博士論文『フランス語の副詞的形容詞について：コーパスデータに基づくスキーマ化の試み』の審査ならびに口述による最終試験を 2024 年 6 月 27 日（木）18 時 30 分から 20 時 40 分にかけて Zoom によるオンラインで行った。その結果、審査委員会は全員一致で、関敦彦氏に対し博士（学術）の学位を授与するのがふさわしいとの結論に達した。

【論文の概要】

■ 論文の構成

本論文は、フランス語の副詞的形容詞（以下 AA : Adjectif adverbial と呼ぶ）を研究対象とする。292 頁にわたる本編 1 冊、および付録のデータ表 2 冊の合計 3 冊で構成されており、博士論文として十分な分量と体裁を備えている。論文は 7 章からなる。論文全体の構成は明解で、分かりやすく執筆されている。第 1 章では研究テーマ、理論的基盤、研究目的を明らかにする。第 2 章では従来の品詞分類および形容詞、副詞、副詞的形容詞の定義に関する先行研究を批判的に読み解きつつ、副詞的形容詞の特性を語彙的観点と統語的観点の両方から統合的に研究する必要性を述べる。第 3 章では、分析の枠組みとして援用する構文文法について解説をしつつ、本論文の中核的概念となる「スキーマ」と「スキーマのネットワーク」について述べる。第 4 章では、研究目的と研究のオリジナリティを明らかにしたのち、調査資料として扱うコーパスに関して説明し、またデータをどのように分析するかを述べる。第 5 章で、特定の動詞につく AA にどのようなものがあるかを記述したのち、第 6 章では、

逆に、特定の AA を従える動詞にどのようなものがあるかを記述する。そして最後に第 7 章で結論と今後の展望を述べる。以下に各章の概要をまとめる。

■ 各章の要旨

第 1 章：はじめに

本章では、研究対象についての説明がなされている。研究対象となるのは、形容詞でありつつも、動詞句を修飾する機能を担う「副詞的形容詞」(AA)である。なお、AA が動詞句内に出現する表現を[V+AA]と呼ぶ。[V+AA]は慣用句的で様々な語彙的、統語的制約を持つにもかかわらず、一定の生産性が見込まれるという二面的な性質がある。このような表現について構文文法の理論を使用し、AA が出現する表現の産出原理を説明することが、本研究の重要な目的である。

第 2 章：本研究の背景や対象

この章では、先行研究を批判的に検討しつつ、伝統的な品詞分類である副詞や形容詞の概念の問題点について論じ、それを踏まえた上で、本研究で扱う副詞的形容詞(AA)の定義を明らかにする。AAには様々な用法があるが、本研究では、動詞に後置されて様態を表す用法を持つ形容詞にのみ対象を限定している。また、AAの使用には、統語的、語彙的制約が見られるが、その一方で、特定のレジスターでの使用においては、AAの用法がむしろ拡大している。また、先行研究に見られる「凝結度」の直観テストに基づく判断は、必ずしも言語の現実を反映していないとして、コーパスデータにおける頻度調査の重要性を指摘する。

第 3 章：本研究で使用する分析枠組みについて

第 3 章では、構文文法の理論的枠組みについて説明がなされている。構文とは形式と意味の対からなる言語単位であり、形態素のレベルから、抽象的構文(スキーマ)のレベルまで様々なものがある。とりわけ抽象的構文について、関氏は紙面を多く割いて説明を加えている。また、構文の中にもそれぞれの項の範列に選択可能性を持ち、生産性の高いもの(統語的構文)と語彙化した慣用句のようなもので、生産性が低いもの(語彙的構文)があり、その中間段階に位置する構文も存在する。さらに構文のスキーマ化は、実際の言語使用を通してボトムアップ的に行われるものであり、新しい言語表現の使用により、スキーマは刷新される可能性がある。さらに「頻度」については、トークン頻度(ある要素が出現する回数)とタイプ頻度(異なる要素が出現する回数)という 2 つがある。また、多義性の問題はその使用される文脈に影響を受けている。こうした構文文法の概念に基づきつつ、関氏は分析に際しとりわけ重要視する点を以下のように挙げている。

- 話者は経験をもとに様々に抽象度が異なる構文を記憶しネットワーク化する。これらが言語知識となる。
- 抽象度の高い構文よりも「動詞クラス固有の構文」や「動詞固有の構文」のように構成要素を部分的に指定した中間段階の構文を重視する。
- 構文の分析に際しては量的な観点も重視する。
- 語の多義性に関しては共起する語の意味を考慮する。

第4章：研究目的と調査方法

この章の冒頭で、関氏は本研究の研究目的とそのオリジナリティについて以下のように述べている。「現代フランス語（1950年以降）における小説のジャンルにおけるAAの使用を分析し、また質的量的双方の観点からの分析も試み、これらの表現を話者がどのようにネットワーク化をしているかという点を明らかにすることが本研究のオリジナリティである。」（本論文 p.121）本研究の調査に使用されたのは、Frantext という文学作品を中心とする書き言葉からなるコーパスである。これは「フランス語の分析と自動処理 ATILF（Analyse et Traitement Informatique de La langue Française）」により作成されたオンラインで使用できるデータベースである。本研究では、とりわけ現代フランス語における[V+AA]の用法を調べるため、時代を1950年～2021年に限定して調査を行った。調査対象語彙となる動詞とAAをFrantextの語彙検索機能を用いて自動で検出した。対象語彙の選択については、Hummel et Gazdik (2021) *Dictionnaire historique de l'adjectif-adverbe*（『副詞－形容詞歴史的事典』）のタイプ頻度順のリストを参照し、動詞についてはタイプ頻度の最も高い5つの動詞である *écrire*「書く」、*parler*「話す」、*vivre*「生きる、住む」、*sonner*「鳴る」、*faire*「する・作る」を選択した。また同様に、AAについても、タイプ頻度の最も高い5つのAAである *fort*「強い」、*haut*「高い」、*bas*「低い」、*droit*「まっすぐな」、*dur*「固い」を選択した。

第5章：[特定の動詞+AA]表現について

この章では、動詞のスロットに先に挙げた5つの動詞を指定した際に、それぞれの動詞と共起するAAにどのようなものがあるかを調べている。共起するAAの頻度に応じて、さらに、5例以上の共起が確認できたものと5例未満しか確認できなかったものに分けた。1例しか確認できないものも多数あるが、それらは文脈上特殊な例、またはパロール的な使用として考えられる。関氏は、頻度が多く共起するものほど、容認度が高く、話者の記憶に定着した表現であると考えている。また、類推による拡張によって、いろいろなスキーマがネットワークをなしていることを考慮しつつ、ネットワークには他の構文から派生したと考えられるスキーマもいくつか加えている。

第 6 章：[V+特定の AA]表現について

この章では、AA のスロットに先に挙げた 5 つの形容詞を入れ、それと共起する動詞にどのようなものがあるのかを調べた。これら 5 つの AA の特徴としては、いずれの語彙も出現頻度が高く、意味的にも基礎的で、かつ、音声的には単音節の短い語彙であることが指摘できる。[特定の V+AA] よりも [V+特定の AA] の方が、共起語彙のタイプ頻度もトークン頻度も高いため、より生産性が高いと考えられる。中でも最も頻度の高かった [V+ fort] について見てみると、fort と共起可能な動詞のタイプ頻度は 550 であった。そのうちトークン頻度で 5 例以上共起した動詞 115 例について動詞の意味分類を行い、それぞれの動詞の意味分類がどのような fort の意味分類と結びついているかを調べた。いずれの fort の意味分類についても、共起動詞が複数確認されることから、それぞれの意味分類について、中間段階のスキーマが存在すると考えた。また、類推による拡張の他にも複数のスキーマの融合による拡張として考えられるものもあった。

第 7 章：おわりに

結論としては、動詞を指定した場合よりも、AA を指定した場合の方が、生産性が高いということが分かった。したがって、話者にとって動詞を指定するよりも、AA を指定した方がスキーマとしてより記憶に定着していると考えられる。fort は中でも特に生産性が高い AA であったが、AA としては珍しく、複合時制中で過去分詞に前置される例が多数出現している。この点から fort は AA の中でも例外的な位置をしめていることが分かった。本研究では、すでに用例の蓄積が十分に進んだ書き言葉のコーパスを使用して分析を行ったが、そもそも AA は話し言葉や SNS などのレジスターでの生産性がより高いと考えられている。したがって、今後はこうしたデータを使用した調査が必要である。

【審査の概要及び評価】

AA の同義語による置換が不可能であったり、出現位置に制約があったりすることから、[V+AA] には語彙化された慣用句としての性質があると言える。その一方で、AA と V のそれぞれの範列にはある程度の選択可能性が存在し、表現に一定の生産性が見込まれるという統語的側面が備わっている。関氏はこの相反する 2 つの性質に着目し、[V+AA] を語彙的要素としても統語的要素としても扱う必要があると考えた。そこで構文を形式と意味がペアをなす単位として考え、両面を統合的に扱う構文文法を理論的枠組みとして採用した。構文文法理論を使いつつ、フランス語のコーパスデータを基に量的、質的両方の側面から、AA の具体例を記述し、そのスキーマ化を試みた研究はこれまでのところなく、この点において本論文は学術的に重要なテーマを扱

ったと言える。

調査対象として頻度の高い 5 つの動詞と 5 つの AA を研究対象として選択し、これらについて、5 例以上トークン頻度を持つ共起要素にどのようなものがあるかを記述した。分析手順としては、まず、動詞を特定した際、どのような AA と共起するかを調べ、構成要素を部分的に指定した中間構文のスキーマを抽出した。次に、AA を特定した際、どのような動詞と共起するかを詳細に調べた。この調査で、AA を特定した際の動詞のタイプ頻度とトークン頻度が極めて高くなることが明らかになった。動詞を中心として構文の構成を見る従来の視点からは導き出されなかった興味深い発見であり、審査委員から高い評価を得るに至った。

以上に見るように、本研究は明確な研究設問を立て、構文文法という理論的枠組みに沿って、膨大なコーパスデータの丁寧な記述に基づき、独創的な分析結果を導きだした点で十分に優れた学術的意義を持つものであるが、質疑応答の場において、審査委員からはいくつかの問題が残されていることが指摘された。まず、本研究で構文文法を枠組みとして選んだ必然性をめぐり、語彙と統語を最終的に統合することは必要だろうが、分析にあたってはある程度区分する必要はないかという質問があった。また、「生産性」という概念をめぐり、頻度の高い表現のスキーマを導きだすだけでなく、さらに、一歩踏み込んで、一例しか存在しない例 (hapax legomenon) についても調査をし、新奇例の生産性にかかわるような、より抽象的なスキーマを明らかにすることによって、研究設問に対するより明確な答えが導き出せたのではないかという意見があった。用例の中には、主語指向性を持つものが見られることから、スキーマに主語要素を含めてもいいのではないかと、といったコメントもあった。また、今回は量的な調査が主となったため、社会言語学的な観点からのコーパスデータの分析がなかったが、具体的な事例の使用の分布を調べる上でも、こうした観点からの質的調査がなされるとよいのではないかと、といった指摘があった。また、論文の本筋にはあまり関係はないものの、副詞の形態論の通時的変遷に関する記述において、若干の疑問点が見られることについて指摘があった。誤字脱字については公開ないしは出版の前に見直しが必要との指摘もあった。

これらの指摘に対して、関氏は誠実に返答した。分かりにくいと指摘があった点については、より明解な説明で補足し、疑問点や誤字脱字については訂正の必要性を認め、調査や分析が不十分であった点については今後の課題とすると述べた。

以上に述べた審査委員による指摘は研究のさらなる改善を目指すために指摘されたものであり、本博士論文の学術的意義を損なうものでもない。本論文が博士号を取得するために十分なレベルに達している点については、審査員全員の意見が一致した。